

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第177号（2021年2月）



白井啓治

（十六） 蒨味噌は春の陽を告げる香

（2009年2月19日）

『霜の割って蒨の臺の顔を出し』

旬を食べるといいうが、人間の欲というのには不思議なもので、どうしても初ものを望んでしまう。旬とは盛りを意味し、盛りの時期こそそのものの味は最高点に達し旨いといえるのだが、気分は初ものに向いてしまう。

我が家の庭に毎年霜を割って蒨の臺が顔を出すのであるが、これを摘んで蒨味噌をこしらえ炊き立ての飯にのせ食すのを行事としている。朝、霜柱の中に凍ることもなく顔を出している蒨の臺を見ていると、この逞しさのお裾分けを頂かなければと思ってしまう。

庭に顔を出す蒨の臺だから、そんなに沢山とれるわけではない。せいぜい六、七個である。しかし、季節の声を聞く香り、土の創りだす味を褒めるのであればそれで十分である。季節の味は欲張ってはいけない。飽食なんでもつてのほかである。この冬は、温かいせいで庭の蒨の臺が例年になく

二十個ばかり採れた。早速蒨味噌をこしらえて、熱々の飯に乗せて数日褒め、楽しんだ。味噌汁に刻んだ蒨の臺を散らすと強すぎると思える春の勢いが体を駆け巡った。本当に今年の元気をもらえたような気がする。



（絵：兼平智恵子）

先日のことである。旬をはしりと間違えて、いやそう思いこんで使っている若い人に会った。正しい意味を教えてあげたのだが、へエ、で済まされてしまった。スパアの野菜売り場に行けば、何時だって何でもあるのだから、はしりだ旬だなんて言葉の意味なんて知らなくても良いわけだ。第

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)

一、路地物の旬の胡瓜を皮が固くて嫌だということだから、彼らにははしりの味だとか旬の味だとかややこしい話しは要らないのだ。しかし、歳の所為なのかこうしたことがやたら気になる。なんとと言っても自給率の無い我が国なのだから、野菜に限らないが季節の味を知らない、解らないとなるとたかが金融不安ぐらいで策を持たずにオロオロするのだから、異常気象の進むであろう将来に大きな不安を持ってしまおう。矢張り野に出て旬を食す事の知恵ぐらいは養っておかなければ、と思ってしまう。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

地域に眠る埋もれた歴史(68) 木村 進
【4 大増・太田・恋瀬地区】(5)

4.5 長楽寺 石岡市龍明

ここ長楽寺は時代劇の映画やテレビの撮影に使われており、ビートたけしの映画「座頭市」やNHKの大河ドラマ「武蔵」や「篤姫」の撮影に使われた。この龍明は町村合併前までは八郷町猪内(むじなうち)と呼ばれており、昔は本当に猪(むじな)(タヌキやアナグマ?)が多かったのかもしれない。



八郷の地名の本にはたしか川が蛇行していて、山肌をむしりとりということから来た名前ではないかと書かれていたように思う。この本堂は県指定文化財となっており、まわりは杉や銀杏などの木々に囲まれ、現在の人工的なもの(電柱、電線、

ライトなど)が360度カメラをまわしても一切ない。時代劇の撮影場所に選ばれる理由であろう。寺の奥は山で、人家はまったくない。

何故このような立派な(本堂の軒下は立派な彫刻が彫られている)建物がきれいに保存されたのであろうか?地元の方々の努力であろう。映画「座頭市」では本堂の中で賭博のシーンを撮影し、「武蔵」では本堂前で殺陣が行なわれた。「篤姫」では第2話の尚五郎が西郷や大久保たちに剣術の試合を挑む場面が撮影された。地元の剣道を学ぶ少年剣士達も参加して剣道の稽古の場面などが撮られたという。

長楽寺は八郷町史によると「薬王山長楽寺、始め滝本本坊といっていたが、慶長十年(1614)長楽寺と改めた。仁王門は約二間半四方で、仁王尊はよく保存されている。本尊は薬師如来で十二神将も安置されている。平田篤胤の「仙境異聞」に出てくる空中飛行の杉山大増正の寺ともいわれる。薬師堂そばには薬師井戸、天狗のたもと石、天狗腰掛石、大乘妙典、六十六部日本廻国塔(宝暦十年、1760)、四国巡礼塔(安永七年、1778)などがみられる。」と記載されています。

創建は天長元年(824年)四月とのこと。仙境異聞の中で天狗の住む岩間山について「峰に愛宕宮がある。足尾山、加波山、吾国山などが並び聳える笠間の近所だ。岩間山の十三天狗、筑波山に三十六天狗、加波山に四十八天狗、日光山には数万の天狗が棲むといわれる。岩間山はもともと十二天狗だったのだが、四、五十年程前に筑波山の麓にある猪打村に長楽寺という真言僧がいた。空に向かつて常に仏道に意を馳せていたところ、あ

る日、釈迦如来が迎えに現れた。本物の仏と思って連れられていくと、釈迦如来と思ったのは岩間山の天狗だった。以来、長楽寺を加えて十三天狗となったという。我が師はそのひとりであり、名を杉山そうしようという」となっており、長楽寺の和尚が天狗となって岩間山の天狗に加わったとされています。天狗の話は多く残されているようです。また少し高台の薬師堂には大きな下駄が奉納されていました。

本堂脇の竹林には大乘妙典、六十六部日本回国塔、西国巡礼塔などの石碑が保存されています。山門の左右には金剛力士像が保存されています。寺は無住で電気も引かれていない。これが映画などの時代劇で利用される条件なのだろう。

道案内としては、フラワーパークの方から大覚寺方面へ進み、途中道が右柿岡方面、左稲田、大覚寺方面に分かれる交差点がある。この交差点のすぐ数m手前を左に曲がる細い道がある。この道を進むと、小山を超えて田畑の道に下っていく。

目の前にみえる住宅の方にそのまま進む。ここが猪内の部落である。部落に入って最初の曲がり角に地藏さんが立っている。ここを左に進むと、上り坂となる。坂をすこし上ったところで道は右にカーブしているが、曲がらずに、真っ直ぐに入る細い道を進むとすぐ突き当りである。

まず、入口の苔むし、少し危なくなつた石段を登る。すぐ上に仁王門がある。そして門の先に本堂が見えるが、この寺は最初に見た者の心をすぐにつかんでしまう。この本堂を空から見ればこの本堂の真上がぼっかりと大きく開いていて、周りを木々が覆っている。このため、寺にスポットライトが当たっているように見えるのだろう。

我が労音史 (27)

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1997年の社会情勢と音楽状況

香港が英国統治から中国に返還(15年ぶり)される、一国二制度が確約された。タイで通貨危機が起こり、世界同時株安が起こる。オスロで開催された政府間会合で、対地雷の全面禁止条約が採択される。ロシアのタンカーが日本海で沈没し、大量の重油が北陸海岸に漂着、全国から14万人ものボランティアが重油除去作業に参集し、7ヶ月で6000KLの重油を除去。消費税税率が5%に引き上げられる。秋田・長野新幹線が開業。北海道拓銀・山一證券・日産生命が経営破綻。

三枝成彰「忠臣蔵」初演。團伊玖磨作曲「建・TAKERU」初演。国際フォーラム・東京オペラシテイ・新国立劇場・すみだトリフォニーホール・札幌コンサートホールが開設された。この年の夏、東京都は「東京都財政健全化計画実施案」を突然に発表。内容は、東京文化会館と東京芸術劇場の会場使用料2倍にする値上げ案であった。驚いた都内の各オーケストラや文化団体、労音も加わった。芸術・文化団体は直ちに「東京都文化施設使用料の大幅値上げを許さない芸術・文化団体の会合(実行委員長・中村絃子P)を結成して「文化の花を枯らすな!」を合言葉に、反対行動に立ち上がる。「許さない会」主催のコンサート「芸術文化都市東京をねがうコンサート」を開催し、2000名収容の会場は、賛同と共感の輪に包まれた。東京

労音は、例会会場で反対署名を呼びかけ、13,081名、全国労音からも6,107名の署名を集める。「許さない会」には賛助団体99団体、寄せられた署名は40,000名に及んだ。度重なる都議会への要請や陳情(12回)で、議会の文教委員会が無所属クラブ(棄権)以外全ての党派反対で条例案は否決となり案は白紙となった。条例案に含まれた積極案(日曜日の夜間使用や夜間時間延長)は、都側と話し合い実現が核にされた。「許さない会」は、前進的に解散し「芸術文化都市東京を創ろう!ネットワーク」の組織準備が進められ、東京労音は同会への参加を表明。

この年逝去された著名な音楽家・文化人・篤敏郎(作曲家)三浦淳史(音楽評論)・住井すえ(作家)星新一(作家)藤沢周平(作家)杉村春子(俳優)西村晃(俳優)勝新太郎(俳優)三船敏郎(俳優)萬屋錦之助(俳優)池田満寿夫(芸術家)沢井忠夫(箏奏者)鄧小平(政治家)井深大(財界)伊丹十三(映画監督)リヒテル(ピアニ)シヨルティ(指揮者)。

1997年の労音の動き

大久保会館で開催された第45回総会は、年間10万人の例会参加者を目指すことを柱にした。会員数目標を提起し幅広い音楽活動を展開させる。例会ニュースの充実、創立45年に向けた企画の研究、共同企画、地域性のある企画、健全財政の確立、関東ブロックや全国労音との交流を進める。多くの民主団体との協力等々を掲げ活動を進めてきた。昨年より、東部・都下・東葛・城北に続いて、都心部でも固定会員制度を導入(会場ごと)した。クラシック会員が伸びなかったのは、会場

改修(東京文化会館)で休館になり、企画や方針が立てられなかった。

○ゆうぼうと会員

南部ブロックが中心となって、品川区報での呼びかけや会場回りでの宣伝活動等を継続し、「美輪明宏コンサート」では230名に会員を拡大、例会ごとゼロからのスタートだった取り組みが、固定会員が組織的な支えとなった。充実した企画の実現とともに、会員拡大の目標を掲げた活動を確認。

○北とぴあ会員

前年度より60名増やし120名の会員を達成。知名度も高く実力のあるアーティストは経費が嵩み、都内の会場は各事務所の手打ち公演が多く、希望のコンサートが実現できない。色々厳しいが、企画の工夫が課題。それでも200名を目指し活動をする事が確認された

○東部ブロック

304名の固定会員を言組織している。企画の遅れや目玉企画が実現できない事が重なり、足踏み状態が続いている。足立区での革新区政実現に、労音も区民の文化要求実現「総合文化センター建設運動」に貢献してきた。これらの繋がりの下に会員拡大を進めていくことが確認された。

○都下ブロック

308名の会員数だが、ここ1年で50名の入会があったが、ほど同数の退会があり横ばい状態。企画内容が同じ、人気の高い企画が少ないのが退会の原因になっている。新鮮で魅力のある企画実現が会員拡大の大きな要件であることが確認された。

○東葛ブロック

固定会員520名で目標を達成した。地域の広範な音楽愛好家に依拠しながら例会活動を積み重ねた

からです。今後も行政や他団体との交流を深めながら活動を進めることが確認された。

全体としては、目標を達成できなかったが、それぞれのブロックが確実に前進した。固定会員の組織率を高めることは、健全財政を保ち会員が主人公の運動を実現します。団体会員については、1年残す方針だったが、会員からの要求もあり現状では、しばらくの間固定会員との併用を考えることにした。

この年の大型バレエ企画は、夏に「ポリシヨイバレエ学校」5公演、秋に「モスクワ音楽劇場バレエ」

7公演、翌年にかけて「ドリーム・クリエーション」(Mプリセツカヤ/熊川哲也)5公演を取り組んだ。夏と秋の取り組みは、今までにない厳しい状況となった。大きな赤字を生んだバレエは、翌年にかけての熊川・マヤの人氣で5例会すべて満席になり、帳尻を合わせた。今後の大型バレエ企画は、リスクが大きいので、企画内容と公演回数を慎重に討論を深めることにした。

今年度3回以上取り組んだ企画は「小柳ルミ子」4回、「伊東ゆかり」3回、「布施明」6回、「由紀さおり/安田祥子」4回、「金子由香里」3回、「小原孝」4回、「HIROSHI」7回、「和田アキ子」3回でしたが、比較的安定した組織ができた。一方で、「グレン・ミラーオケ」「プラターズ」「マントヴァーニオケ」など毎年来日する企画は年々厳しくなっている。独特なスタイルと魅力ある演奏で大好評のHIROSHIピアノコンサートは、7回も成功させており今後最も期待できるアーティストの一人です。

海外招聘企画は「中国京劇院」「ベトナム民族ア

ンサンブル」を取り組んだ。前年が日中国交回復25周年と言うこともあり、数多くの京劇団が来日し、競合した厳しい取り組みとなった。京劇院は中国を代表する団体でもあり、全国的に大きな評価を得た。「ベトナム民族アンサンブル・バフォー」は、リーダーバフォーを中心としたファミリーなアンサンブルで、主に小ホール企画として取り組んだ。竹の楽器を中心として、息の合った演奏からベトナム民族の優しさと豊かさが伝わり、温かいコンサートになり、全国的にも高い評価の例会であった。

各センターを拠点として地域に根差す活動を進めてきた。そして、センターの貸し出し収入の目標も達成している。

○労音大久保会館
地下にある、2ndコート企画を積極的に取り組み、4ステージ増やし25ステージの企画を決めたが、動員が厳しかったのが課題です。

○十条センター
地域を中心に「十条まつり」を開催し、150名の参加で盛り上がる。センター開設10年なるが、地域の人が気軽に行ける場所として、着実に前進している。

○お茶の水センター
各センターの中では最も利用率が高く、会場の空き日がない状態。この利用者との交流の中で、労音活動との新しい体験が生まれている。

○東部センター
定着している「日の出寄席」「音楽の楽しみ」の他に、会員によるライブコンサートも4回企画。今後も地域に根差したセンターとしての役割を果たしおり、地域の多くから期待もされている。

○南部センター
前年から準備中の「民族音楽教室」が夏から開講、現在週2回の教室が行われている。

○ギター文化館
ギター愛好者を中心に会員400名を維持し、会館主催のコンサート(キャパシティ100名、年間12回)も毎回成功させている。ギター館を拠点として新しい労音構築に向けた模索もしている。

東京労音が関東労音ブロックから独立して2年目を迎えた、関東ブロックは着実に前進を続け、全国労音の励みになっている。東京労音は、関東労音の幹事会や交流会に参加し、企画の共同などを進めている。この年キューバで、世界青年学生祭典が「反帝・連帯・平和・友情」のスローガンで開催された。東京労音から3名の代表を派遣。

この年、長年労音活動の中心として活動した私は、39年間務めた会社(ニコン)を早期退職(54歳)し、労音の専従として働くようになる。

全国労音連絡会議は、伊豆長岡「富士見ハイツ」で40団体91名の参加で開催。関東ブロックに新しく「狭山労音」が発足し、東京労音は関東労音ブロックから外れ、新たに東京労音ブロック(東京労音・労音府中センター・労音東部センター・労音東葛センター)として新設。「こまつ労音」が東海労音ブロックから関西労音ブロックに転属。「松山音鑑」「いわてフォルテ」が解散し、北海道ブロック7、東北ブロック6、関東ブロック9、東京ブロック4、信越ブロック4、東海ブロック4、関西ブロック9、山陽道ブロック10、四国ブロック4、九州ブロック5の63団体の参加となった。(つづく)

石岡市指定文化財(三十) 兼平智恵子

石岡市ふるさと歴史館では令和三年一月六日(水)三月二十八日(日)、第二四回企画展 廣瀬栄一コレクション 瓦編 を開催しております。
高浜地区において文化財の研究や保護に関する取り組みを積極的に行った、合資会社廣瀬商店、酒造業「白菊」六代目 廣瀬栄一様より石岡市に寄贈された多くの文化財の中から、古代から近世にかけての「瓦」を紹介しています。

開館時間 午前十時～午後四時三十分

月曜日休館(祝日の場合は翌日) 入場無料

石岡市総社一〇二〇十 石岡小学校内

電話 029912312398

※ 新型コロナウイルス感染症防止の為に県独自の緊急事態宣言により、令和三年一月十九日～二月七日迄臨時休館となっております。

今回の文化財は石岡市根小屋に存在する片野城址を案内いたします

片野城址

根小屋八四七

史跡

昭和四七・四・一九指定

この城は通称佐久山、または天神臺の城と呼ばれる中世に築かれた平山城である。初代城主は文永年間(一二四〇～一二七四)の頃、小田氏(戦国時代小田城主小田氏治)の一族、八代将監が小田城の北の守りの砦として築いたと伝えられている。

その後太田資正、石塚義辰、瀧川雄利と四代の城主によって江戸期の寛永二年(一六二五)まで続い

た。主郭(本丸)は三mに及ぶ土塁に囲まれており、そこを中心として曲輪が南北八〇〇mの巨大な様相を呈している。

城内には堀や城の出入口で戦争時には激戦区となる虎口(こゝち)、城内から打って出る時に馬や兵を集めさせる馬出しと思われる遺構、地形利用しての横堀、縦堀、薬研堀、など存在している。

城主で最も著名なのは太田道灌の曾孫に当たる太田美濃守資正(三乗斎)である。資正は岩槻城(さいたま市)を本拠とする武将であったが、第二次国府台合戦で北条氏に敗れ、居城を締め出された。

その後佐竹氏の客将となり、手葉井坂(てはいざか)の戦いでは、資正の次男 梶原政景(稀岡城主)や真壁氏と共に小田氏を破る活躍を見せた。

その後も三男の資武と共に片野城にいたが天正九年(一五九〇)の秋、六九歳で病死しました。以後は佐竹一門の石塚氏入城。やがて徳川の世となり佐竹氏と共に石塚氏は秋田に遷りました。

そして最後の城主、羽柴老岐守瀧川氏は城が廃されるまでここにとどまり、根小屋地区内の泰寧寺に墓が存在します。

尚城内に山門の残る浄瑠璃光寺の墓地に太田資正公の墓があります。久しぶりに伺った時に、滋賀県草津市の太田家は清和源氏の流れを汲み道灌から数えて第十八代当主太田實則を伯父に持つ太田士朗様が敬慕する先祖の供養の為にと修繕されてありました。

ここで片野城に心寄せて頂いた方々の為に、これから車で案内いたします。

先ず常陸風土記の丘の駐車場から出発です。間もなく丁字路左折、通称ふるさと農道、鬼越峠を越え、大きく左カーブ、左側に茨城県畜産セン

ター、出発してから約5分、右側に泰寧寺、左側は絶景!

広々とした田園とこんもりとした富士山(ふじやま)をいざくように、すそ野を雄大に広げる三角形の筑波山!私自慢の数ある風景の中の一つです。

そのまま左カーブ進むと恋瀬川にかかるふるさと橋へ……こちらへは帰りのお楽しみ。

左カーブ手前で右折(右側泰寧寺入口、間もなく「止まれ」の三角標識のところ左折、そして右折、まるで虎口のように!また左折、そして緩やかな上り坂、IⅤⅧ迄の曲輪(八郷町史頁三二六頁参考)のある片野城に到着です。(出発より約八分)

正面に真言宗豊山派浄瑠璃光寺の山門、真つすぐ進むと佐久山と額のついた戸閉のお堂、七、八台駐車出来る境内。山門に立ち、左側には墓地群、太田資正公のお墓は北側一番右奥に参る事が出来ます。

山門より右側には高さ数十mの電波塔、この辺りで中世末から近世初頭の墓地のあとが確認され、鉄砲玉や六道銭が検出されたと言う。

墓地群前の道路を進み下り坂に入る所、右側に鳥居が見え奥に七代天神社が鎮座しています。奉納される代々十二面神楽については無形民俗文化財になっていますので次回ご案内します。

下りて行くと丁字路右折、間もなく山縣大弐の墓の案内板のある十字路右折、民家の間を上って行く、右側にブルーの屋根瓦の民家を過ぎて右カーブ、そして左カーブ、まるでお堀のあとに出来た道路のようです。左側に車三台位駐車出来る空地あり。徒歩で更にながると、左側に市指定史跡片野城址の石碑と片野城の説明板、この間を進んで行くとIVの曲輪に入ります。

そこは現在は、ねぎや白菜のある畑になっていきます。ここから西に目を向けると眼下に田園と民家そして筑波山と連山が見渡せました。そして進むこと、Iの曲輪、本丸になります。現在は杉の木がきちんと整列、植えられています。畑にいた老婦人が、「物不足の戦時中はあの辺（本丸）は野菜や食べられる物色々作っていたんだよ」と言っておられた。

車に戻り、此の道を前進、丁字路右折、更に進み右折、ぐるっと電波塔のある、山門のある最初の場所に帰ることが出来ます。地形を利用して築かれた大規模な城郭遺構。まだ先の見えない不安なコロナウイルスの世、活躍した武将や武人の心意気に触れてみませんか。

帰りはふるさと橋を渡り、振り返って、みて下さい！ 雄大な筑波山を背に、佐久山が見えます。電波塔も見えます。左に目を移して行くと木々の途切れた辺りは老婦人とお話しした野菜畑辺りにちがいない。

参考資料 八郷町史 八郷町の地名

石岡の歴史と文化

○のちの世は杉木立に守られし

もののふの館 智恵子



八十路の峠に立って

伊東弓子

七十の峠に立った時もふっと振り向いて、若く精一杯、元気で頑張ってきた自分を誉めていた。でも今登ってきた道や曲がり角、休憩所には、沢山の落し物・置き物・忘れ物が散らばっているのが見える。余りにも欲張りすぎて、あれもこれも手掛けた仕事が多過ぎたのだ。言い訳ではないが、尊敬する先生お二人の気持を背負って、後へ繋げなければ、火を消さないようにしなければと、気負い過ぎたのかもしれない。古文書、玉里御留川のこと、石佛調べ（美野里）（小川）のことだった。その前からの議会傍聴と報告づくりと配布、ふるさと“風”の会、ボランティア“玉里の自然と史跡を護る会”、その他あれこれを一緒にやっていると思い込んだ。しかし無理なことが少しずつ分ってきた。だんだん自転車で出かけるのが億劫になってきたり、日を延ばすようになってきた。そういう気持を察してか、妹は早くから手伝ってくれたり、娘達までの応援に甘えるようになった。それでも、はちきれそうになった苦しさの中で、試行錯誤などという立派なものではないが、私の中から遠退いていった活動が幾つかあった。リーダーと会員の不仲の事、マンネリ化したものは解決には難しく逃げ道を作っていく姿をとっていった。そんな屁理屈を並べながらも首が回らない程の忙しさ、悲鳴こそあげないが、「これが終る迄は、病気になるってられない」と、意地を張っていた。そこには遅れて間に合わなくなったり、資料が見当たらなくなったり、挙句の果て、協力してくれている仲間や、周囲に迷惑をかけていった。

若い日（四十年前も前）内田さんが「一日は二十四時間しかないんだよ。誰も二十四時間しか持っていないだよ。その範囲でやれる方法を工夫していかんだよ」と、心配して言ってくれた人の言葉を、心に留めず、推し進めてきてしまった自分が今ここにいます。その結末はあちこちにある塵屋敷になりかねない姿だ。これから歩いて行く路で少しずつ手を付けていこう。

衣類が増えている。お洒落をする訳でもないし、買い漁る訳でもないが溜まっていく。整理し、修理し、再利用もせず、かと言って捨てる事も出来ず積み重ねていく。結局家庭の主婦としての能力がないのだ。さあ一頑張りしなくてはだめ。

大切な物も塵になった。結婚前の思い出や子供の頃の作品が処分の出来ないまま、何十年とあの山小屋の中に積み重なっている。動ける中にと思ってたこの一月に話しをしてきたことで、先ず一歩進んだ。重荷が少し軽くなったようにも思えた。

桜塚の草刈り、枝払い、歩道にかかる木々の移動は新しい芽が出ない中、強い根が増えない中に始めたい。本当に少しずつの作業だが根気よくやる。

畑づくりの再現にチャレンジしてみよう。

「二足の草鞋は履けないんだよ」と、苦笑いしながら言ってくれた人がいた。その人の親切な言葉を思い出す。本当にそうだった。あの頃二月豆も、葱も細く充分には育たなかった。素直さのない自分が繰り返していく失敗だったがその一本一本がいとおしかった、からこそ実現させたい。

小さなビニールハウスを二つ片付けたいが一寸怖い。中に入れた物はどうしただろう。見たくない気もするが、勇気をだしてやってみないと、い

つまでもあの俛ではだめだ。

親として子供との係わりを深く反省している。

忙しく過ごしてきた中で、足りなかった愛情、落ち着かなかった三重の生活と環境、怪我をした子のことを思うと今も胸が痛む。充分な教育を受けさせることもなくきた子供達、今それぞれが一生懸命生きている姿を有難く思う。親としての接し方も不十分だった子供達が、今優しくしてくれる。私のだらしない生活態度とは違ってきたらして、いる生活姿勢は、誰に似たの。親の力不足な点を子供達自身が補って育ってくれたのだろう。何の思いからなのか時々夢の中に出てくる情景は、いつも同じ小さな社宅の生活の一部である。壁も床もゆっくりする場所もなく、戸棚や箱が積んである所を幼い子供達が走り回り、笑いながら隠れたりして遊んでいる。泣いている子はいない。それが私にとつての救いだった。同じような夢を何度見たことだろう。あんな日に戻る事ができたらと思ひ涙に濡れて目が覚める。過ぎたことは仕方がない。父親からいいものを沢山貰っているはずだ。残り少ない時間の中で、出来る限りの誠意をもって接していこう。五十代に入った子、もうすぐ入る子、それぞれ健康に充分気をつけて生きていって欲しいと願う。最後に私の見取りをお願いしておく。亡き後は姉兄弟妹仲良く生きていくようにと、幾つも幾つも願いがあがる。

婆さんとしての孫のつながりは、何にも増して生きていく力になり、これからも支えになってくれるだろう。思い出しただけで笑みが浮かんでくる。どの孫とも私の時間と力と知恵をだして遊んだ。遠い夕陽を追いかけた日、毎晩月の形が変わっていく姿を見たあの部屋、爺ちゃんの発掘仕事

を応援した日、はこの家まで歩いた日、かるた取りをした日、雨と雷のなる中を自転車走った日、嫁さんも娘も私に託してくれた、もつともつと沢山の思い出がある。想い出を共にした孫達が私の血筋をつないでいってくれることだろう。私と夫が、山形、天童、千葉、飛騨高山、水戸、岐阜、大垣、土浦から受継いだように・・・。

活動してきたことも少しずつ終わらせる事を考えていこう。“石佛・石祠”のことは地域の人に依頼していく。小川・美野里地区のまとめた物を公的施設に置かせてもらうよう働きかけていこう。“古文書”のことは、文書を通して地域を考える仲間づくりをしていってもらうよう目ぼしい人に頼もう。“ふるさと風”は出来る限り続けたい。地域の歴史や昔話をまとめていけるように仲間と真剣に語り合いたい。“玉里御留川”は、霞ヶ浦を見つけていく中で歴史・塵のことを考える仲間であるようにしていきたい。その他の活動は必要な時参加し、行き詰ったら自然脱退していこう。これからも、一日一日の生活リズムを崩さないでいこう。

“いづみ”との散歩は大切に考えている。人に会える、ばかりでなく犬同士の出合いも大切にしたい。四季折々の自然界から力を貰える。玉里御留川を眺めることが出来る。そこには釣り人、御留川歩く会で会った土地の人のことを忍んで、無事に生活を送れるよう願ったりすることが出来る。食事は確りとり、食べ物は大切にし、一緒に口にする仲間も仲良くしていこう。

この年齢になって、主婦としてやっとなやまけることになるだろう。

夜はよく寝て明日の力を貯えていこう。そして

母の年齢まで確り元気になりたい。それ迄に、全て片付けが出来よう努力していこう。

そうしたら、今迄願っていた、佛教を学ぼう。十年はかかるといわれているコロナとの戦いの中で強く生きていかねばならない。貯えたお金はなにかから病気にはなれないのだと、決めている。後は自然に扱って貰おう。

子供達を育てた桜塚の所で、一部室で充分の住居。“いづみ”と、鶏を飼って、四季を愛でていく。友の所へでかけたり、訪れた人と茶を飲んでお喋りをしたり、嘆いたりするのもいい。落葉を燃やし、土を穿くり、葉を摘んだり、花を育てたりしたい。韓国へも行けるだけ行きたい。

大きな世界、自然界の中でその一部の小さな範囲で生きていこう。

そう願っていても私の“我”が、又、芽を吹き出したらどうしよう。

怖い・こわい・コワイ。

悲しい

小林幸枝

少し前、ネットニュースから流れてきたニュースは、とても悲しく、大きな憤りとなった。最初は、私の友人のインスタグラムの投稿でこの話を知りました。

その話（ニュース）というのは、ペットサロンに預けたシェパード犬が死亡した事件です。

この犬が死亡したのは、サロン経営者の過剰な「しつけ」による虐待があったためだと、飼い主がメ

ディアやSNSを通じて訴えていたのです。

飼い主の20代男性は、2021年1月28日放送の日テレ系情報番組「スツキリ」のインタビュアーに
応じ、生後10カ月で飼い犬が亡くなった経緯を次のように説明していました。

20年6月から、犬のしつけを兼ねて週に2、3回このサロンに預けていました。

そして、21年1月12日にサロンから飼い犬が死にそうだと電話があったのです。急いで病院に駆けつけたときには、すでに死亡していました。

サロンの経営者は、シャンプー中に犬が暴れたので「しつけ」をしたと説明し、これは事故だったと謝罪してきました。

証言によると、飼い犬はドッグランで遊んで泥だらけになり、従業員と生徒2人の計3人でシャンプーを始めたそうです。その時にこの経営者が来て、「しつけ」だとして、犬の首輪を直接シंकの手すりに繋ぐように指示しましたが、犬が嫌がって首輪を抜き、それでまた押さえ付けて再び繋ぎ、頭から水をかけることを繰り返させたといいいます。

その結果、犬は窒息したように一瞬気を失い、自力で立てなくなっていました。

犬のシャンプーは通常は30〜40分しかかからないのに、このときは2時間ほどもかけていたといっています。

その後、30〜40分経っても回復せず、犬を動物病院に連れて行くと、犬は口の中ものを吐いたそうです。病院が心肺蘇生を試みたのですが、そのまま息を吹き返さなかったのです。

飼い主は、獣医に犬の解剖を願い出て、毛を剃

ってもらったところ、足の甲や脇に打撲の跡のような青あざができていたといっています。

亡くなったシェパード犬のご冥福をお祈りいたします。

これは、愛犬家にとって悲しいニュースでした。



〈父のこと 29〉

菊地孝夫

最近、毎回のようになり締切りぎりぎりになって原稿を上げているので、今回は早めに書いています。近頃は馴れが出てきて、気持ちもゆるみが出てきたかもしれない。変換ミスなどもちゃんとチェックしていこうと思う。

この春は、3、4冊分の原稿があるので、推敲したうえでこれを製本していこうと考えています。風の会の皆さんは、皆それぞれ思い思いに本を出されていますので、遅まきながら私もそれに加わろうと思います。

今年は、書初めの真似事もしたし、墓参り、ついでに神社にも二カ所行って見た。暮れからは毎日、赤飯と餅を交互に食べている。

おせち料理はここ何年も口にしていないし、年越しそばも食べなくなった。鏡餅も飾らない。

年賀状も書かなくなったので、来なくなった。「代わりに、3年前からこうして書いています。」

しめ飾りも買わない。

菊地家には、破魔矢、破魔弓、熊手の類もなかった。古くなって、煤で真っ黒になったいつものかわからないお札が十枚ばかり小さな神棚に乗っていただけである。祖母が水を上げていたようだが、誰も神棚など拝んだりはしなかった。仏壇にもお燈明を上げたり。

子供の私は、線香を取ってきて、火をつけて虫を焼き殺したりしていたな。

すべて縁起物だということだが、御利益など有ったことがない(笑)。

街を歩くと、門松を見かけることがすくなくなつた。以前は普通の家でも、そちらこちらに門松が立っていたものだが、今は商店などだけになつてしまったようだ。

しめ飾りは、下がっているが、付いている橙はいえはプラスチックの作り物。

如何にも味気ない正月風景になってしまった。蒼空に浮かぶ、凧の姿も見られなくなった。おもちゃ屋などでも、凧は売らなくなったのだろうか。

相も変わらず、新型コロナウイルスの話

遠からず世界の感染者数は億を超える。ウイルス自体が変異を繰り返すから、現在開発されているワクチンも、どこまで効き目があるのだろうか。性急に実用化されるため、十分な治験が行われず、副作用の可能性の問題もある。

更に致死率の高いものになったら、お手上げだ

ろう。

おなじアジア圏の国々のうちで、飛びぬけて高い感染率となっているのは日本である。1月7日の時点で、全国の一日の感染者数が6000人を突破した。日々の感染者数は、急速に増える一方となっている。

感染者数の増加は、検査人数の拡大という要因もある。是まどえ、感染者数が少なかったのは、そもそも検査する人数が圧倒的に少なかったからに過ぎない。

お隣の中国、台湾、韓国、北朝鮮などはなんとか感染の増加を、低いレベルに抑え込んでいるようだ。

トランプ大統領のアメリカ、ジョンソン首相のイギリス、そしてボルソナル大統領のブラジル。この三国では感染者の増加は収まらず、爆発的な増加となっている。

この三人に共通するのは、三人とも感染し、その後、重症化しなかったこと。それをいいことに、コロナ・ウイルスの脅威を軽視し続けて碌な対策を取らなかつたが故に、蔓延にいつその拍車をかけてしまったこと。

現在の日本も、これらの国々の後を追うように感染者の増大が止まらない。

テレビでは連日、感染者数の報道がなされているが、その元となっている数字の多くは、かつての「大本営発表」を思わせる出鱈目な低く操作された、作られた数字である。

一例をあげれば、「重症者が昨日50人」とか言っているが、この中に「死者数、十人」は入っているのだろうか？

何とかして、少しでも数字を低く見せようとして見ているのが見え見えである。何ら有効な手立てできないまま、いたずらに蔓延を傍観しているだけとしか思えない。

こうして、意味のないグラフを示して、夏のオリンピック頃には収束するんじゃないかという、淡い期待を持たせているだけである。

例えば、大相撲などは、10数人の感染者がいても、開催を強行した。去年の時点ではこのようなことをすれば忽ち非難ごうごうだったろうに。それを紹介しているコメンテーターたちも、この点を指摘する者はいはしない。

ふたたび「緊急事態宣言」を出そうかどうかどうしようかと、検討なさっているようですが、もう「検討」などと言って、ろくな結論も出せないような無駄な時間を費やしている段階ではなかるうよ。

と書いてから幾らも経たず、十の都府県に緊急事態宣言が再び出された。更に次々と緊急事態宣言がなされ、過半数の自治体にまで広がった。この茨城県でも発令された。

相も変わらず、小出しに発令するために、その効果が後手後手に回っている。

私たちとしては、自身がいつコロナに感染するかを不安を抱えながら、日々を生きていくしかない。

この間の急激な感染者の増加により、ベッド数も足りなくなり、軽症者の宿泊施設すら確保されていない。

無症状者に至っては、すべてが自宅待機である。PCR検査数を、何倍にも増やしていくという話などは、いつのまにかどこかに行ってしまう

した。

本気で対応すれば、今頃は世界に先駆けて、全国民のPCR検査を終わらせることができたはずである。

その結果が、従来言っていたような低い感染者数にならないとしても、疫学的には重要な数値であり、世界にも胸を張れる成果となったはずだ。

残念ながら、この分野における先駆けとなれたのに、貴重なチャンスを逃してしまった。

何としても、夏のオリンピックを開催したいがため、このような結果になってしまったわけである。

このさき、有効なワクチンを日本が開発しても、後発になってしまうことだろう。

もはや苦笑いするしかない。

国内の感染者の総数は、公式発表の数倍はあるだろう。ここ茨城も、そろそろ大きな波に飲み込まれようとしている。

感染症の専門病棟も少ないし、設備や人員の確保も無理であると思う。検査によって感染が判明しても、受け入れてくれる医療機関はない。

有効なワクチンの接種も、果たしていつになることか。

毎日、神仏に祈ることしかできませんかね。(笑) やれやれ。

緊急事態発令のあたりで、市立図書館が1月18日から2月8日まで休館となってしまった。私としては、迷惑な話で調べ物が出来なくなってしまう。

もう何度か書いた気もするが、ニュース番組で、外国の交通事故の模様が報じられる。

これが我々と一体何の関係があるのだ？ ニュースの取捨選択に当たっているものには、ジャーナリストとしての最低のセンスが欠落している。

放送時間が余ってしまったなら、このような何の役にも立たないものをだらだらと流さず、動物の映像でも流せばよい。

今年、丑年だからどこかの牧場の乳牛の画像でも流せばよい。

一月のはじめ、アメリカでは、トランプ支持者が国会議事堂に乱入した。大統領選挙の結果に不満を持った者たちである。

アメリカ議会史上、前代未聞の不祥事となった。トランプ自身は、この行動に直接関与していないと否定しているが、明らかにあおったのは事実である。多くのフェイクニュースを流し続けてもいる。

九十年程前、ナチスドイツがやっていたようなことを、現代でもやってしまうという、病めるアメリカの現状がここにある。

風と共に

《理》

大輪啓展

拾 知

今月のテーマは、「知」

前回のテーマ、生。生きる事は知る事であると、そう考えています。

或いは学び。

小さな頃から現在に至るまで、様々な事象に触れ見聞を広め、皆それぞれ知識を深めている事でしょう。

勿論、明日知らぬ世ではありませんので、その日を無事に必死に生きている。そんなところではないでしょうか。

無知は罪であり、知ろうとしないのはさらに深い罪である。どこかで耳にした事がありますが、推して知るべしだと感じました。

学べるチャンスは世の中にゴロゴロと転がっています。

それをどう捉え行動するのか、そこに差が出てくるのでしょうか。

私の周囲でこんな事を耳にしました。

その方は何か調べ物をしていたのでしよう、ですがある程度探してみても答えに辿り着けなかった、その時にふとこんな事を言っていました。

「見つからないから、知っている誰かに聞けば良いや」

諦めの言葉です。

探していた答えを誰かに聞いたとして、その時は覚えているでしょう。

ですが、期間があいて例えば1年後、同じ事を覚えてはいません。

人から答えをもらおうと言う事は、その人の知識であり自分の知識ではないからです。

それでは、どの様にすれば良かったのか。

仮に、今回の事象が急ぎ知らなければならなかったとします。答えを誰かに聞き役立てたのなら、事が終わってから自分でもう一度、その根拠となる物を自分で調べ直す。それが重要な事でしょう。

苦勞して、自分で探して覚えた事は、そうそう忘れる物では無いからです。

もし、皆さんにも当てはまる様なことがあれば参考程度に覚えて頂ければと思っています。

彼を知り己を知れば百戦殆うからず、孫子に見える格言ですが、人との関わり合いにおいては誠にその通りだと思えます。

何かの問題が生じたとしても、その内容を把握し自分の力量に照らし合わせながら行動していけば、自ずとうまくいくものです。

他人と比べるのでは無く、自分の力量を自分自身が正しく理解する、それが何より大事なのではないでしょうか。

世界には様々な分野において研究がなされ、日進月歩にて新たな道が切り開かれています。

森羅万象を司る事は不可能ですが、人間が人間たる、学び進歩していく事こそが、何万年という先代たちから受け継ぎ、未来へのバトン渡しと繋がっています。

多角的視野を育み、他分野に興味を持ち、知識を深めると同時に、世の流れを時と共に感じているのも、心豊かに充実した日々を送る生活へと、繋がっていく事でしょう。

そして、知見を広げて更なる未開の地へと挑み続ける、そんな事も人生における1つの楽しみ方ではないでしょうか。

様々な事を述べてきましたが、どの様な世界にも表裏が存在します。

知識におけるトラブルも、皆さんの想像通り起きてしまうものです。

代表的な事は、自分よりも劣る相手を卑下したり、傲慢な態度をとってしまう様な事は、度々目にするかと思えます。

折角優れた才能があるのだから、爪を隠して大きな度量を持つて接して欲しいものだと、常日頃から感じる次第です。

その方がみんなが幸せになれる筈ですから。

知る、という事は、今その人に見えている世界が、一瞬のうちに変わっていく、狭い範囲でしか感じ取れなかった心が、大きく開放される事にも繋がるのです。

是非今後の皆様におかれましても、多様に興味を持ち、様々な世界の扉を開けて頂きたく、今回のお話を終わりにします。

次月のテーマは、「心」とします。



【風の談話室】

《読者投稿》

やよい書いっ (48)

やよい女

益々猛威を振るっているコロナ感染症、衰えを感じません。今は一人ひとりが充分に気を付けることが大切なのかな・・・？

・連日続く寒い日、夕方になってもバケツの水は凍っている。今日は気分転換も兼ねて、「どきどきファーム」へ買い出しに行く。その足で溜沼までドライブ、沼は静かで誰一人歩いていない。野鳥たちが長閑に泳いでいた。この溜沼はラムサール条約に登録されていて、野鳥観察会も盛んに開催されているようです。沼の周りは遊歩道になっていて、野鳥を見ながら寒風の中散策してきた。

・コロナで自粛生活に入った昨年3月中頃からのウォーキング、余程の事が無い限り毎日の日課となった。午後4時頃から毎回5〜6キロ歩き、キロ11分から12分の速さ、最初は息切れと筋肉痛で相手についていけなかったが、今では5キロでは物足りなくなつた。夫はシューズを3足履きつぶした。1足などは靴底に穴が開いた。コロナ感染拡大で大変な1年だったが、こうして無事大晦日を迎えられたこと有難く思う。来年は、明るい希望にあふれた年になることを願います。皆さま今年はお世話になりました。来年もよろしくお願いたします。歩いて、歩いて・・・
○お友達から返事が「金魚ちゃんが生き生きしています」いつも気にかけて・・・お店に来ては綺

麗にお掃除してもらえて御主人にも感謝です、今年も宜しく願います。

・こちらこそよろしく願います。オリーブさんはホツとする場所でこちらの方が感謝です。今年もみんな楽しんで時間が過ごせますように！

・新年あけましておめでとうございます。今年もよろしく願います。今年のお正月は2人でのんびりと過ごす予定でしたが、息子夫婦が急遽やってきて一泊して帰っていった(数日前のPCRは陰性だったと?) 嬉しいやら慌てるやら・・・青空に誘われドライブがてら初詣や茨城空港の見学など楽しみ、夕方帰っていった。

・御前山方面へ・・・道のえき「かつら」から、那珂川の河川敷に降りて石拾い、水槽に入れられるような、形の良い丸っぽい物を選んで頂いてきた。キャンプ場には1人又は家族連れがテントやキャンピングカーで10組位の方が楽しんでいました。楽しみにしていた道のえきは、生憎と今日までお休みだった。

○お友達から「そこは、赤い橋の手前の直売所か、赤い橋の先に美味しいラーメン家さんがあるのだから」。

・そうなんだ、赤い橋の5キロ先まで行ったのに残念。また石拾いに行くので、詳しく教えてネ！寒かったのでラーメン食べたかったな！

・夕方、夫が石岡市内で知人との約束(会食)があつて出かけると言う。帰りは迎えに来て欲しいとの事。羽鳥駅まで歩こうかなとの呟きに、一緒

に歩いて行く事になった。午後3時半家を出て、ひたすら歩き4時40分羽鳥駅着。7キロ弱だった。夫は電車で石岡駅に、私はバスで自宅にと別れた。バスの時間は5時、少し時間があるので駅舎に上がったその時、真っ赤な夕日が、思いがけないご褒美だった。夕日が沈むのを眺めているうちにバスの時間となり10分程のバスを楽しんだ。バス代は320円だった。

○この夕陽を見ていたお友達から、素敵なた陽でしたね。木下さんに「綺麗だよ」って教えたかった？やっぱり：・何処かで見えてましたね(笑)。それにしても羽鳥駅迄お散歩考えられない、脱帽です。

○九州の友達から、「ひえー」羽鳥まで歩かれた！健脚元気でですね。320円分のご褒美は歩けたという自信と素敵な光景ですね。

・そうです、歩いていると、いろいろご褒美が散らばっていて面白い、今まで気付かなかった事とか・・・

○凄いなー羽鳥の駅迄は結構あるよねービックリ！

・びっくりだよ。人間からだんだん遠くなっていく。

○大丈夫、僕は昔から往復7キロの山道を、雪の日も雨の日も15年間通って今が有る。そして今は、少し人間に近くなったよ!!又四ツ足になる日も近いかも？やっぱ四ツ足から二本歩行に又三本足になるから二本歩行で頑張ってください。三本になる時は僕がプレゼントします。ステキなステキを・・・?

○7 Kmのウォーク流石です！歩き慣れていらっ

しやるから出来ることですね。ご褒美の夕日が綺麗！

おすすめの本

燕 石(えんせき)

暮れから正月にかけてのテレビの番組は押しなべて面白いものはなかった。近年になく不作だった。撮り貯めたものや、再放送ばかりだった。映画もいいものはなかった。例年なら一つか二つは、おやつと思うものに出会えたのだが。

歌番組や、おふざけだけのお笑い番組などは、見る気も起らない。

B Sでは「戦艦大和」「戦艦武蔵」の特番を続けて再放送していたが、およそ正月の三が日に放送する内容じゃあるまい。

其の中身も、取り立てて伝えるほどの物でもなく、今更、当時ですら、無用の長物といわれたものを仰々しく取り上げることはあるまい。

海戦史的に言っても、さしたる成果は上げていないのである。むしろ、もっと小型の艦艇とかの方が戦果を挙げている。

「大和」に至っては一隻の艦艇すら沈めてはいない。艦体が世界最大級であり、主砲が最大だったというだけである。

主力戦艦同士の、大砲の撃ちあいによる決戦は、長いこと海戦の光景であった。けれども航空機の出現、レーダーの発明、潜水艦からの魚雷の発射等、兵器の急速な発達により、艦隊同士の決戦は全くの時代遅れとなってしまった。

日清、日露の戦争に於いての海戦の勝利という「過去の栄光」にいつまでもとらわれた結果、時

代の趨勢をすっかり見誤ってしまったのだ。

地上戦に於いてもしかりである。このところ作られる映画・テレビドラマなどは、見る気にもならない。

世間では「鬼滅の刃」という漫画がはやってる。映画化もされて、若者を中心に空前の観客動員数となったらしい。

元より、筆者は現在の漫画やアニメには全く興味を失っているので、詳しい内容については判らない。

更に現代もののドラマなどはこのところ全く見ない。脚本がつまらないのだと思う。合間に流れるCMにも、うんざり。

(こんなものがどうしてヒットするのか、わたしには全くわからない。)

設定自体が、突拍子もないものであったり、様々な制約で、背景が作りつらくもなっているのかもしれない。

(例えばよくあった、タバコを吸う場面は小道具として使われていたが、今は、すっかり見られなくなった。)

時代設定は、大正期となっているようだ。妖怪によつて鬼とされ、口もきけなくなってしまう妹を救うために、自ら剣を取って妖怪たちと戦うという物語であるらしい。

あくまで架空の物語ではあるけれど、そもそも人と魔物・妖怪とは住む世界が違うことになっている。

異世界と人間界との戦いは、古今東西を問わず、数多くの物語が作られた。北欧の神話やインドのマーハーバータラや中東のアラビアンナイト、中国

の神仙伝など。

日本の伝奇小説の多くも、これらからヒントを貰っている。

とりわけ筆者が好きなのは、中国の怪異譚である。聊齋志異をはじめ箭燈新話、神仙伝など数多くあつて何度読み返してみても面白い。

今のような時代には、人々の心はどうしても内向きになりがちになつてしまつて、悲しいことは、およそありえない仮想の世界にしか思いをめぐらすことが出来ないであろうか。

今回の「おすすぬ」は、

「ある奴隷少女に起こつた出来事」

ハリエツト・アン・ジェイコブズ 著

新庁舎文庫 H29年7月1日

1800年代のアメリカに生きた、女性の自伝である。この本が最初に出版されたのは、今から200年ほど前。

ずっと長い間この本は白人作家による創作と思われ続けていた。最近になつて研究が進み、実在の人物だったことがわかり、アメリカ文学の中でも、ベストテンに迫るものとなつてゐる。

エドガー・アラン・ポーやマーク・トウエイン、ディケンズやブロンテ姉妹などのアメリカを代表する作家たちと並ぶ人気を獲得しているようだ。

アメリカで行われていた奴隷制度は、南西部を中心とした広大な農業地帯で重要な労働力となつ

た。農場主たちは、もともとインディアンの物であつた土地を次々に（不法に）占拠し、あまりの広大さに、人手が足りなくなつてしまつた。

奴隷商人が、アフリカ各地からさらつてきた黒人達を、二束三文で買い上げて牛馬のように酷使したのである。

アメリカ農業を支えたのは、これら黒人たちの労働によるところが大きい。これによつて、アメリカの資本家たちは、短い間に巨万の富を蓄えることになる。

奴隷とされたものの数は数百万人と思われるが、今となつては正確な数さえわからないだろう。動物を駆り集めるようにアフリカの村々を襲い、遠くアメリカ大陸までの長い航海のあいだには、多くが命を落とした。

二代、三代と住み続けるうち、子供を産んでその数はさらに多くなつた。ほとんどが父親の判らない私生児で、多くは農場主などに手籠めにされた結果の混血児である。

著者の両親は黒人奴隷の身分ではあるが、どちらかに白人の血が流れているために見かけ上は白人と変わらない。

自由奴隷と言つて、持ち主にながしかの金を払つて奴隷身分から抜け出すこともできた。それには数十ドルから数百ドルの金が必要だったが、無給で働く人々にとつて此の金を貯めることは至難の事でもあつた。

この女性も、10代の半ばから、持ち主の性的犠牲になる所だつた。幼い弟とともに、親元から引き離され好色な医者の家で召使として使われる

ことになる。

やがて、すきをみて逃亡し、幾多の困難を乗り越えて、自由を獲得する。

奴隷同士の結婚は、持ち主にとつて新たな資産となる子供を産むためのものではない。ひそかにあいびきして、子供を妊娠でもすれば相手の男は、酷い打ちを受け、遠くへ売り飛ばされ、生まれた子供は母親から引き離され、奴隷として育てられる。

いわば家畜と同じ扱いを受けるわけである。家畜より劣るのは、有無を言わさず性の奴隷にもされることである。

当然、反乱が起き、白人が殺された。これを恐れて、銃により武装した。

この伝統が今も続き、誰でも簡単に銃を手にすることができ、人口を上回る銃器があふれ、しばしば事件を引き起こしている。毎年数万人が銃によつて命を落としている。

全米ライフル協会に代表される銃器信奉者は、議会に多額の献金をして、銃規制の法案成立を妨害し続けている。

朝鮮や日本、ロシア、或いはヨーロッパ、中東においても奴隷制度はあつたが、他国の民族をこれほど大勢、奴隷化した例はないだろう。

奴隷制度が廃止されると、移民政策を取り、労働力を確保しようとした。

アメリカン・ドリームという、立身出世の夢物語も、その多くは、じつはこれらの安い労働力の搾取によつて成し遂げられたものに過ぎない。

M・トウエインの「トム・ソーヤーの冒険」や「ハックルベリーの冒険」には、奴隷身分の者が登場する。アメリカ中南部が舞台のこの物語では、奴隷や先住民の「インディアン」、後にプア・ホワイトと呼ばれる貧しい白人が重要な登場人物として描かれている。

これ等がアメリカ文学の上位に位置しているのは、単なる児童文学にとどまらず、当時の庶民の暮らしを生き生きと活写しているからである。

また映画「風と共に去りぬ」では、大勢の黒人奴隷が出てくる。日本の時代劇の足軽のようなセリフもない役とは違って、重要な舞台回しの役目を担っている。

E・ブロンテのこの小説もベストテンに上がっている。

これ等のプロの物書きと並んで、上位にあげられるというのは、すごいことだろう。アメリカにはまだまだたくさん作家がいるというのに。

実験に裏打ちされた物語は、フィクションを凌駕してしまうということなのだろう。

ハリウッドでは多くの映画がつくられるが、奴隷反乱を描いた映画は見たことがない。

茨城県の難読地名とその由来 (11)

木村進

大甕【おおみか】 日立市

「大甕」は鉄道駅名や神社名などに使われ、住所表記は「大みか」である。「甕」は「みか」とも読むが、一般にはこれだけなら「かめ」である。

甕(かめ)は、土器、陶器の一種で、貯蔵、運搬、発酵、

化学反応に用いられる容器と辞書にはある。

また、この字は、弥生時代中期に北九州、山口県地方を中心に埋葬のために遺体を納める容器として甕が使用され、甕棺(かめかん)として知られるとも書かれている。すなわち大きな甕(かめ)は大人の埋葬用の棺甕ということになる。

また、神にささげる酒や食べ物などを入れた甕(かめ)も大甕と呼ばれたようだ。

ではこの日立市の「大みか」はどんなところなのだろうか。

この地名が付いたのはここに「大甕倭文神社(おおみかすじんじや)」があるからに他ならない。常陸国一宮の鹿島神宮では、入口の随神門(ずいしんもん)を入ると、拝殿は右側にあるが、正面に小さな祠「高房社」がこちらを向いて建っている。

この高房社は鹿島神宮の摂社の一つで、現地の説明には「武甕槌(タケミカヅチ)大神の葦原中国平定に最後まで服従しなかった天香香背男(アメノカカセオ)を抑えるのに大きく貢献した建葉槌(タケハヅチ)神が御祭神です。古くから、まず当社を参拝してから本宮を参拝する習わしがあります。」と書かれています。

これがどういう意味かというと、鹿島神宮の武神「武甕槌(タケミカヅチ)」は、ヤマト朝廷の勢力を北へ拡大していたのだが、この日立地方に住む「天香香背男(アメノカカセオ)」という星を信仰する蝦夷(エミシ)が強く、抵抗も大きかったのでなかなか征圧できなかったのです。そのため、建葉槌(タケハヅチ)に命じて、この天香香背男(アメノカカセオ)を退治させたのです。この大甕神社にはこの建葉槌(タケハヅチ)命と退治された天香香背男(アメノカカセオ)の両方

が祭られています。

天香香背男は宿魂石という大岩に閉じ込められています。(岩山の上に祠があります)

またこの建葉槌命は常陸国二宮である静神社にも祭られています。

現在国道6号線は久慈川を過ぎるとこの大甕の山にぶつかり、道路は山を削り、この山にあった大甕神社を東西2つに分断してしまいました。

この歴史的な言い伝えを信じてとして、この「大甕(おおみか)」という地名の由来をみましょう。

日立市の説明によれば、この「大甕」は、神と人の住む境界として「大甕」が埋められていたか、あるいは「大甕」において祭祀が行われた地であったと考えられます。となっています。

はたしてそうでしょうか。

他の「大甕」という名前の地名には、福島県南相馬市原町区大甕(おおみか)があります。

日立市の説明は志田諄一氏の「大甕」という地名について『日立史苑』第4号に記された内容が基になっているようです。では、その説明を以下に記します。

★「甕」の使用例

(1) 祈念祭の祝詞に「大甕に初穂を高く盛り上げ、酒を大甕に満たして神前に差し上げて、たたえ」ことを言ったとあります。

(2) 『播磨国風土記』に丹波と播磨の国境に大甕を埋めて境としたとあります。

これらの例から、大甕(おおみか)は、酒を入れた器で、神事に使われ、また何らかの境界に埋められることもあったことが知られます。

★大甕と神社

「常陸国風土記」や「播磨国風土記」には、山の峰に住む神と里に住む人との境界(山口・山本)に社(やしる)が建てられた話がみられます。

大甕の地も、風の神山・真弓山へとつづく多賀山地の南端のふもとにあたります。まさに山口にあたるこの地に大甕神社があります。

なお、現在の南相馬市原町区に大甕があります。この大甕に延喜式内社に比定される日祭神社があります。この神社の由来は、日本武尊東征の際、平定を祈願してこの地に天照大御神を勧請したといひ、大甕という地名は、祈願の際に祭壇にささげられた酒をもった器にちなんだといわれています。

★大甕の由来

以上から、大甕は、神と人の住む境界として「大甕」が埋められていたか、あるいは「大甕」を以て祭祀が行われた地であったと考えられます。

★従来の説

(1) 甕星神説(大甕倭文神宮社記)「常陸風土記」曰く、大甕は甕星神の居所の土地なり。故に大甕と称す」

↓ 現伝本の「常陸国風土記」には、大甕や甕星神の記載がなく、根拠がない。

(2) 天津甕星説(大甕倭文神宮社記)「当社縁起」曰く、建葉槌命は天神の勅をこうむり、天津甕星を誅して倭文郷に鎮座す」。ゆえに大甕倭文神宮といつた。

↓ 倭文郷は、現在の茨城県那珂市静の地をさす。天津甕星は「日本書紀」にみえる神であるが、大甕とはなんら関係がない。

(3) 甕星香々背男(みかぼしかがせお)説(宮田実『大甕より久慈浜あたり』)「大甕の地は先住民族と

して古典に載ることこの甕星香々背男と称する強賊の占拠していたところであったために伝えて此処を大甕と称すると云われている」

↓ 甕星香々背男と大甕を結びつけるものはなにもない。

と従来説や神社に伝わる話を否定しています。

しかし、常陸国風土記が書かれたのは8世紀初めであり、この地の蝦夷人と戦ったのは4〜5世紀のころと考えられます。

ヤマト朝廷が蝦夷人たちのことを土蜘蛛などと呼び、自らの歴史からは消し去っていますので日本の歴史はこの大和朝廷が仙台の多賀城やこの常陸国を征圧した後に確立したものしか書かれたものはありません。その前の伝説を数百年あとの時代の勝者が好きに書いた内容だけが正しいと言えるのでしょうか。

地名には明らかにそれ以前の蝦夷人、縄文人たちの言葉が伝えられたものがたくさんあるのです。

常陸旧地考 (8)

菊地孝夫

下巻 (一)

三、神社

延喜式神名帳その他古書などに載っている諸國の神社のうちには、中津世から乱世の継いで、人の心もすっかりすさんでしまい、皇神(おやかみ)を祭るべき事もすっかり忘れて、早く廃れたものが多く、いまの世までも正しく伝えていないものも少なくない。それを、後の世には人の癖として、己が仕える神がある中に、尊き神、名高き神、にしたいと願い、ともすれば古書に載る神を侮り、求めてその神なりと偽り構える類いが世に少なからず。たいそう味気ないことである。確かな伝えも

なく、定かな証拠も無いのを、強いてその神とこじつけるのは、中々その神の心にも叶わぬものである。

また国々の神社の中には祭神の伝えない社もあるのを、強いて「何々の命」なり等という類いがこれまた少なからず。いとうるさい事なり。確かな伝えもなく、定かな証拠も無いのは、その社号即ち神の名なり。強いて「何々の命」などと由もなき神を引当てるのは大きな誤りなり。

神は八百万の神といつて数多く、古事記、日本紀そのほかの古書などに見える神だけではない。

名の伝わらぬものも多くあるのを、その名の伝わらぬ神を、斎(とき)祭れる社もあるから、社号即ち神の名と心得て、尊み祭るべきことなり。されば、伝え無き社の神に古書に出ている何々の命」を引き当てれば、思いのほかの違いも出てくる。

さて、この常陸国の延喜式またそのほかの古書などに載せたる神社は、早くに廃れて世にも忘れられたものが多く、国誌が選ばれし時、伝わらぬがあったとみえて、某神の社の今ある所を知らずとあるのを、近き世には神名帳に載りたる二十八社、欠けたることなく、みな悉く備わっているのは、仕える「信」徒の偽り設けたるものもあるだろう。

また国誌が選ばれし時、尋ね漏らしたものもあるであろう。その由はその条々にて云うことにする。

さて国誌に「阿彌神社不知今在所」などは、極めて尋ね漏らしてある。今の信太郡の安見村の鎮守阿彌神なること疑いなし。それは神社の名の地名になって残るのは某神社として知られ、またその地に座する神社を某神社と称することもあり、地名に残るのは大方疑いない。地名は朝に設けて

呼び換えることはとても稀で、まずはいにしえより唱え来るままに呼ぶものだからである。

○鹿嶋ノ神ノ宮 かしま

延喜式神名帳に、常陸國鹿島郡に二座〔大併〕鹿島神宮〔次名神大月新嘗〕、云々。

古語拾遺に、既に天照大神、高皇産靈尊、崇皇孫下らんと欲して、豊葦原中津国主、経津主神を遣わし〔これは磐筒女神の子、いまの下総国香取神これなり〕武甕槌神〔これは甕速日神の子、今の常陸國鹿島神これなり〕駆せ除き平定する、云々。旧事本紀に、武甕槌之男神またの名、建布都神は、今の常陸國鹿島大神、即ち、石上布都大神これなり、云々。清原宣賢の神代紀鈔に、武甕槌神は、大和國春日第一殿に鎮座、即ち、常陸國鹿島明神これなり、云々。

風土記 鹿島郡の条に、惣領高向太夫、下野国海上国造部内軽野の以南一里、那賀国造部内寒田以北五里を分割して、神郡を置き、其所の天之大神社、坂戸社、沼尾社、三社合わせて香嶋之大神と総称する。高天原より降り来た大神は鹿嶋天之大神と称する。天にては即ち香嶋宮と号し、地にては即ち豊香嶋宮と名のる、云々。

續日本紀に、天平宝字二年（758）九月丁丑、常陸國鹿嶋神の神奴二百十八人を神戸と為し使わしむ、云々。同書、宝龜八年（777）七月乙丑、内大臣從二位藤原朝臣良繼、病む。氏神鹿嶋社正三位香取神正四位上を叙す、云々。また十一年（779）十月丁酉、常陸鹿嶋神社を祝ぎ、正六位上、中臣鹿嶋連大外、從五位下を授ける、云々。又、十二月壬子、常陸國、言あげする。神財七百

七十四人脱漏する。神司に編入を請い、みだりに良民を認めらしめ、神財と為し、仮に靈異に詫びしめ、既に朝章を侵せり。今より以後、さらに申し請ることをなからしめんと、云々。

續日本後記に、天長十年（833）四月丁丑、常陸國鹿嶋大神を祝して外從八位上勳八等、中臣鹿嶋連川上に外從五位下を授ける、云々。同書に承和三年（836）五月丁未、常陸國鹿嶋郡從二位勳一等、武建御加都智命に正一位を授ける、云々。また冬十月丙辰、下総国香取神の禰宜曰く、常陸國鹿嶋に準じ、宜しく、近代相續いて、同じく笏を取ることを許す、云々。また同六年（839）十月丁丑、常陸國鹿嶋郡正二位勳一等、武甕槌之神に、並從一位を授ける、云々。また同十二年（845）七月丁卯、常陸國、去年二月二十七日、符により物申す。鹿嶋大神宮の権宮司を補任するに、庶務の務めは正任に異ならない。

古老曰く、「延暦以降、大神封物を割いて、かの諸神社に幣を奉る。弘仁よしかるに、奉幣の朝使ただ正任當色を給いて、権任給せず。祭礼の場同官にて、異色なり。望み請う正任に準拋し、給例預けたればこれを聴く、立てて恒例と為す、云々。延喜式神祇式に、名神祭二百八十五座。うち鹿嶋一座、云々。また凡そ諸国神社やぶれるに従い修理する。但し撰津国住吉、下総国香取、常陸國鹿嶋などの神社正殿は二十年に一度改造。その〔幣〕料は神税を用い、神税無きは、正税を充てる、云々。また内蔵寮式に、鹿嶋香取の祭り、鹿嶋社〔宮司禰宜各一人、物忌み一人〕香取社〔宮司禰宜各一人、物忌み一人〕云々。

主税寮式に、およそ鹿嶋香取社、幣帛奉り、これ日に物忌み三人賜り、云々。

三代實録に、貞觀八年（868）春正月二十日丁酉、勅す、云々。これさきの常陸國鹿島神宮司の申す大神の苗裔神三十八社。陸奥國菊太郡に一社、岩城郡に十一社、標葉郡に二社、行方郡に一社、宇多郡に七社、伊具郡に一社、亘理郡に二社、宮城郡に三社、黒河郡に一社、色麻郡に三社、志太郡に一社、小田郡に四社、男鹿郡に一社、有りと聞く。この方、絶えて奉ぜず。此の由にて諸神崇りをなす。物の怖れまことに頻繁にある。」

嘉祥元年（848）当国請いて状を移し、奉幣彼に向かえり。しかし陸奥國は旧例に無いと称して、関に入ることを聴き入れず。宮司ら関外の川辺に幣物を祓い棄てて帰る。それより、神の崇り止まず。境の内、旱（ひでり）、疫病がおこる。

請い望み、彼の國に下知し、関の出入りすることを聴き、諸社に奉幣し、以て神の怒りを解き、その幣料は、大神の封物を用いんと、また申す。鹿嶋大神宮はすべて、六箇院。二十年間に一度修造を加え、所用材木五萬余枝、工夫十六萬九千余人、料稻十八萬二千余束。宮材を採る。この山は那珂郡にあり、宮を去ること、二百余里。行路、峻嶮、挽き運ぶに煩わしく、伏見造宮材木は多く栗の木を用いる。この樹は伐り易く、また早く復し、宮辺閑地且つ、栗樹五千七百株、楢四万株を植え、望み請う。神宮司をつけ命加殖兼て、齋（とき）守りしめよ。太政官処分並依り請け、云々。風土記に、高天原より降り来たりし大神の名は、香嶋天之大神と稱す、云々。近江大津朝のとき初

めて、人を遣わし神ノ宮を作る。それよりこのかた、修理絶えず、云々。

神名帳に陸奥国黒川郡嘉島天足別神社、巨理郡鹿嶋伊都乃比氣神社、鹿嶋緒名太神社、鹿嶋天足和氣神社、信夫郡鹿嶋神社、岩城郡鹿嶋神社、牡鹿郡鹿嶋御兒神社、行方郡鹿嶋御子神社など見える。

神の位階の事、ある説には神に位階を授け奉るは、位田を寄せられるべき料と言うのは、人臣に給う位階を、神に授け給う事の似つかわしからざるにより、思いよりたる事なり。されども、これもなお、誤認なり。位田も奉公する人の俸禄なれば、神に位田のあるべき事はない。

さて位とは、座居（くらい）の意にて、列座の次第をわかす事なり。されば神は神の位階、人は人の位階にて、神の初位は、人臣の一位よりもはるかに尊きものと知るべし。

無位の神をも天皇の齋宮まつり拝みたまえるにても、神の位階と人臣の位階とは別なることを知るべし。これは石原正明の爵位通行に言っているのを、その要を積みて記せり。ここに要なき事ではあるが、人皆のいぶかり思う事なれば記し置くことにする。

* 爵位通行…未詳

【特別企画】

打田升三の太平記（6） 卷第三・1

○ 主上御夢の事、付楠の事

太平記も卷第三に入る。「主上御夢…」とは天皇

が夢を見た話であるが、天皇でも庶民でも生きていれば夢も見ると寝言も言う。国家の中心に位置していた天皇が夢ぐらいで驚いては仕事にならないけれども、頼るものが夢だけ…という状況に置かれていたらしいから気の毒ではある。

また「付」として「楠の事」が書かれているが楠木正成と言えは戦前、戦時にかけて忠臣の鑑とされた人物である。それが原本で「付」扱いは大日本帝国全盛時代に「忠君愛国」の思想を歪曲誇大化して国民に強制していた証拠となる。

それは兎も角、話を戻すと元弘元年（一一三二）八月二十七日に後醍醐天皇は比叡山にも居られなくなり笠置へ夜逃げをした。此処は京都府南端部の木津川沿いに在る標高三百メートルほどの笠置山に置かれた古寺で、城の代わりになる様な天然の要害であった。然し、寺は寺であるから天皇が住むとなると不都合もある。取り敢えず一番広い本堂を「皇居」と名付けて誤魔化した。

「天皇が笠置へ逃げた！」と言う噂は直ぐに広まったが幕府を恐れて初めのうちは誰も寄り付かない。しかし比叡山東坂本の合戦で六波羅勢（幕付側）が負けた！と言う話が伝わりと僧兵を始め、近隣諸国の尊皇派武士が少しずつ笠置の古寺に集まり始めた。しかし、それらの武士団は、いづれも小規模な地方組織であり二百騎、三百騎と纏まった兵力を持つ大名格の武将は一人も来なかったから御所の警護も満足には出来ない。

そうした現状に気付いた後醍醐天皇は心配の余り夜も安眠が出来ずに居て、その分、昼間から居眠りをしていたのだが其の時に夢を見た。夢に出てきた場所は天皇が夜逃げして来るまで住んでいた御所内紫宸殿（内裏正殿）の庭である。其処に

常緑樹の大木が有り、当然だが南側の枝が茂っていて鶯が絡んだりする。其の樹下に大臣以下の公務員が序列に従って座り、南に向いた上座に畳を重ねて牢名主が座るようにした席がある。

夢であるから天皇も勝手に座れずウロウロしていると二人の童子が現れて天皇の前に跪（ひざまず）き、気の毒そうに涙を流して「…既に天皇には天下に身を隠す場所がありません。然し、あの大樹の陰に南向きの席が有り、それは天子の為の席ですから、暫く其処に座って居て下さい」と言つて風のように消え去った。

後には何も残らないがコジツケで考えれば「木偏に南」で「楠（くすのき）」になる。其の陰に南向きで座れと言うのは天皇が南面の徳を治めて天下の勇士を召される前兆で有ろう。是が天の啓示である。と勝手に決め込んだ。夢から醒めた天皇は笠置寺の幹部・成就房律師を呼んで「…此の辺りに楠と言う武士は居るか？」と訊ねた。

成就坊は「近辺では聞かない名ですが、河内国金剛山の西には楠木多門兵衛正成と言う武勇に優れた武士が居ります。第三十代・敏達天皇四代の孫・楠諸兄の後胤ですが土着して久しく、其の母が志貴山（奈良北西部生駒山中）の毘沙門天に百日間、参詣して夢想により授かった子と言われ、幼名を多門と申しました」と答える。

天皇は喜び「それこそ、夢のお告げの人物！」と勝手に決めて藤原藤房に楠木を呼び出すように命じ藤房は勅使として楠木の館に向かった。現在で言えば葛城山、金剛山、生駒国定公園、河内長野市に囲まれた辺りと思われる。予告も無しに勅使の訪問を受けた楠木は驚いたが、事情を聞いて天皇に同情したから、取り敢えず誰にも気づかれ

ない様にして笠置へ出かけて行った。

世間から見放された様な天皇に味方してくれるのであるから素直に喜べば良いのだが、落ちぶれても自分が偉いと思ってる後醍醐は直接に口を利かない。藤房を通じて「天下を回復するには如何にして勝つか申して見よ！」と偉そうに言った。世間慣れた武士ならば「勝手にしろ！」と言うのだが田舎育ちの正成は恐縮して意見を述べた。

「此の頃の東夷(とうい)東国に居る野蛮な者、此の場合は鎌倉幕府を指す)の大逆は目に余るものがあり、是は天罰を受けて当然のことですから撃ち滅ぼされるのに何の支障がありませんか。然し、天下を創り変える為には武略と智謀が必要です。是が伴わなければ日本国中の軍勢を集めて武蔵・相模の両国軍勢に対抗しても勝つことは出来ません。(天皇の看板だけでは何も出来ません)しかし強大な敵の武力も慎重に計画を立て謀(はかりごと)をもつて戦えば恐れるに足らず、撃ち砕く事が出来るのです。そうは言っても合戦の習いですから、一度や二度の勝負で結果をお決めになれませんように。楠木正成が生きると言う噂があれば、未だ天皇の御運も開かれると思し召し下さい。」と力強く言い放つてから楠木正成は河内へ戻って来たのである。

○ 笠置軍(かきぎのいくさ)の事、付・陶山(すえやま)小宮山夜討の事

楠木正成の動きから後醍醐天皇が笠置に居ると分かったので近辺の武士団が天皇に味方すると言う情報京都に伝わった。是を聞いた幕府方は比叡山の僧徒らが力を盛り返して六波羅へ押し寄せる

事を警戒し、配下の武士団に召集をかけてから、先ず佐々木判官時信に近江一国の軍勢を付けて大津へ向かわせた。此の兵力も多くは無かったので丹波国から久下、長澤の一族を添え合計八百余騎で大津東西の宿に布陣させた。更に元弘元年九月一日には六波羅の両検断(幕府機関)から糟谷三郎宗秋と隅田次郎左衛門とが率いる五百余騎の兵を宇治の平等院へ駐留させて近辺武士団の到着をチェックしていた。当時の武士団は暇だったようで、京都・奈良近辺で何かあったらいいと言う情報が集まると、諸国の軍勢が次々に集まって来て其の数は十万余騎に達したのである。

幕府軍は後醍醐天皇方への攻撃開始時期を九月二日の午前十時と決めていたのだが、世の中には目立ちたがりがるおので、九月一日には高橋又四郎と言う武士が抜け駆けの功名を狙い、一族の勢力・三百余騎で笠置城の麓に押し寄せて来た。天皇に味方して城内に籠った兵力は三千ほどであったけれども元気だけは良かったらしく、敵は小勢と見て活気づき、一人も逃がすな!とばかりに木津側の畔まで降りて来て戦った。

攻め寄せた方は強い敵が出て来るとは聞いて居なかったで慌てた。逃げるとすれば谷沿いに流れる川へ入るしかない。木津川の上流であるから川幅は狭いが流れは急である。敵には無く逆巻く水流に討たれる者が続出した。その多くは流れから逃れる為に武装を捨てたから裸同然の姿で京都に逃げ戻って来たので「見苦しかりし有り様也」と原本に書かれて市民の物笑いとなり、高橋勢は平等院の橋詰に歌で風刺されてしまった。「木津河の瀬々の岩波早ければ、懸けて(仕掛けて程なく落ちる高橋)：市民の目は厳しい。」

此の時に高橋の抜駆け作戦を知って、高橋が失敗したならば入れ替わって功名を立てようと後に続いた小早川と言う武士も、同時に追い返されて何も出来なかったもので其れも立札で風刺された。「懸け(かけ)も得ぬ(抜掛けも出来ない)高橋落ちて行く水に憂名(浮き名)を流す小早川哉」これら幕府軍の失敗談は瞬く間に巷に広がり天皇方の勢力が勝利した：というので近隣諸国の武士団が勝ったほうに加勢する兆候が現れ始めた。

幕府では一刻の猶予もならないと、集まるだけの勢力を宇治に集結させ九月二日に笠置城攻略を開始した。先ず京都近辺五か国の軍勢七千六百余騎を搦め手(後方)に回し、表に当る東側には東海道十五か国のうち伊賀・伊勢・尾張・三河・遠江の二万五千余騎を伊賀路から金剛山越えて向かわせた。更に北方からは山陰道八か国の軍勢一万二千余騎を山麓回りで正面攻撃に充て、西からは山陽道八か国の軍勢三万二千余を木津川沿いに二手に分けて差し向けた。「笠置の山の四方二、三里(十キロ程)が間は尺地も残さず(攻撃軍で)充滿したり」と原本にあるように、七万六千近い軍勢が小さな笠置山を囲んだから、幾ら天皇の味方でも勝てる要素が少ない。

明けて九月三日の午前六時頃に攻撃軍は東西南北から一斉に城攻めを開始した。景気づけに関の声(ときのこえ)喚声(喚声)をあげたので其れが山中にこだまして百千の雷鳴に聞こえ天地も動くばかりであった。三度、喚声を発してから戦闘開始の挨拶代わりに鑄矢(唸る矢)を射掛けたのだが、城中は無人のように静まり返っている。

此の笠置城(山)は標高が三百メートルも無いけれども峯が険しく谷が深い。山頂の小城へ向か

うにはつづら折りの細道を巡り廻つて十八町（二キロ以上）も登らなければならぬのだが城方には其の間を加工して堀や石塀を設けていたから容易には登れ無いためである。攻撃軍七万五千は岩を伝い枝に取り付き決死の覚悟で其処を登つて来たのに敵の挨拶が無いので拍子抜けした。途中に仁王堂が有、其の辺りが城の一の木戸になるらしい。

其処で一息ついて山頂の城を見上げると、何時の間に現れたのか錦の御旗に金銀で日月を飾った軍旗が光り輝き、其処に三千余の武者が兜の星を輝かし鎧の袖を連ね、攻撃軍を見下ろしていた。さらに櫓の上や防壁の陰には狙撃手が射撃態勢を整え待ち構えていたのである。此の状態では、寄せ手の先陣を切つて登つて来た武者たちも攻め様が無く、また、退くことも容易では無いから不利な状態の俣で防衛態勢をとつている他は無い。暫くすると木戸の上の櫓から矢除けの板を開いて顔を見せた武士が豪快に名乗りを挙げた。

「三河国の住人、足助（あすけ）次郎重範が忝く（かたじけなく）も一天の君（当代天皇）に頼まれて此の城の一の木戸を固めている。先陣として攻めて来られた旗印は美濃・尾張の方々とお見受け申す。お持て成しに大和鍛冶が鍛えた鏃（やじり）を少々用意しているので、一筋受けて御覧なさい！」と言ふなり、三人張りの弓（強弓）に一三束三伏（長めの矢）を力一杯に引き放つた。

其の矢は真下に居た敵を無視して谷を越え二百メートルほど後陣に控えていた荒尾九郎と言う武士を鏃ごと串刺しにしたので本人は助からない。傍に居た弟の荒尾弥五郎が是を敵に見せない様に前に立って「足助殿の御弓勢は評判程のものでは有りませんね。試しに此処を射抜いて御覧な

さい！」と胸を叩いて挑発した。

足助次郎は其れを聞いて「此の者は鎧の下に鎖か鉄の胴巻をしている」と見抜き、相手の注文を外して兜を射ようと決めた。矢壺から強い矢を選び出して呪（まじない）に鼻脂を塗り、「やらば、ご注文に応じよう」と、鎧の紐を緩めて力一杯に引き絞り射放した。矢は狙い通り相手の兜を射通し眉間（みけん）の中央に食い込んだから痛いと感じる間もなく絶命し、兄弟共に倒れた。是が合戦の合図のように大手、搦手、城内の至る所で矢戦が始まった。とは言つても狭い山城の中であるから両軍共に活動範囲は制限される。騒ぎばかり大きくて戦闘効果は薄い。それでも人数に勝る攻撃軍は日没頃には木戸口近くまで寄せて来た。

此の時、城中には奈良の般若寺から御経を届けに来て帰り損ねた本性坊と言う大力の僧が居た。行き掛かりで戦闘に加わつたのだが、僧衣の袖を結んで通常の者ならば百人でも動かせ無い様な大石を軽々と抱えて毬の様に攻撃軍に投げつけた。是に依り多くの者が粉碎され或いは弾き飛ばされて東西の坂は武士やら気の毒な馬で埋まつた。此の為に合戦が済んでからも暫くは木津川の流れが鮮血に染まつていたと言われる。

そうしたことから多数を誇る攻撃軍も積極的に城を攻めようとする者が居らず、離れた位置から城砦を包圍して矢を射掛ける程度のことしか出来なかつた。ところが九月十一日になると、河内国から急報が届き「楠木兵衛正成と言う者が天皇方に付いて拳兵した為に是に同調したり逃亡したりする者が現れた。楠木軍は地元から兵糧を奪い赤坂山に城格を構え、七百騎ほどで立て籠つた。是を放置して置くと大事になるので、速やかに救援

を頼む！」と幕府方の役人が要請して来た。

笠置は落ちず赤坂城の楠木は強い。幕府方は大騒ぎになつたのだが、更に今度は備後国（広島県東部）から急使が来て、櫻山四郎入道なる者が一族を率いて天皇方に付き、幕府に反旗を翻した旨を報告した。備後一の宮に城を構えて立て籠り其れに同調して近国から集まつた勢力七百騎程が備後国中を抑え他国へ進出する勢いで有ると言う。

こちらの方も「救援の部隊を派遣してほしい！」と手紙に書いてあるのだが、京都でも笠置城の守備が強固で他国救援どころでは無い。幕府事務所が置かれた周辺の東西南北が敵になるのであるから六波羅の責任者・北方駿河守は慌てた。鎌倉宛に救援要請を乱発したので相模入道こと北条高時もさすがに驚いて救援軍を派遣することにした。是がまた大掛かりにならざるを得ない。最初から救援していれば小規模な派兵で済んだのに：

どうでも良いとは思ふが、後の戦国時代に活躍する武将の先祖も多いので救援軍の幹部級を列記しておく、次の様な顔ぶれになる。

大將軍・大佛陸奥守（北条）貞直

將軍格（北条一門）・北条遠江守、普恩寺相模守、塩田越前守、櫻田三河守、赤橋尾張守、江間越前守、糸田左馬頭、印具兵庫助、佐介上総介、名越右馬助、金沢右馬助、遠江左近大夫將監治時、足利治部大輔高氏

侍大将・長崎四郎左衛門尉

諸国武士団・三浦介入道、武田甲斐次郎左衛門尉、椎名孫八入道、結城上野入道、小出出入道、氏家美作守、佐竹上総入道、長崎四郎左衛門入道、土屋安芸権守、那須加賀権守、梶原上野太郎左衛門尉、岩城次郎入道、佐野安房弥太郎、木村次郎

左衛門尉、相馬右衛門次郎、南部三郎次郎、毛利丹後前司、那波左近大夫將監、一宮善（いぐぜ）民部大夫、土肥佐渡前司、宇都宮安芸前司、宇都宮肥後前司、葛西三郎兵衛尉、寒河弥四郎、上野七郎三郎、大内山城前司、長井治部少輔、長井備前太郎、長井因幡民部大輔入道、筑後前司、下総入道、山城左衛門大夫、宇都宮美濃入道、岩崎弾正左衛門尉高久、同孫三郎、同彦三郎、伊達入道、田村刑部大輔入道、入江・蒲原一族、横山・猪俣両党、その他に武蔵・相模・伊豆・駿河・上野五か国の軍勢―合計すると二十万七千六百余騎の大軍勢である。これが九月二十日に鎌倉を発つた。なにしろ数え切れない程の大軍勢であるから九月末に先頭部隊が美濃・尾張には入っても後方部隊は未だ駿河国を進んでいる。

そうした情報は笠置を囲んだ幕府側軍勢にも届いていたから救援軍が来るという安堵感も有ったが良く考えると微妙である。大軍勢で笠置を落とせば、苦戦を続けていた自分たちの苦労が水の泡になる：どうせ助からない戦場ならば目立つ中に後世に名を残す働きをして置こう：と思いついた者が居る。木津川の対岸に布陣していた備中国の住人・陶山藤三郎義高と小見山次郎である。

かつて源平合戦の折りに活躍したと言われる梶原平三（景時）、熊谷次郎直実、佐々木四郎高綱らの行動もそれぞれの理由が有つてのことである。今、此処で攻めても落ちない城を、救援部隊が来る前に我らだけで落としてしまえば名声が古今に並み無く、武名は萬人に伝わるであろう：丁度、今宵は気象情報も荒れ模様だと言う。風雨に紛れて城内に侵入し、夜討ちを仕掛けて世間を驚かせよう！と一族郎党五十余名を誘った。決死の覚悟

でそれぞれが着衣に経文を書き付け、準備として岩山に登る縄梯子を作り、熊手を持ち太刀は背にいて激しい風雨の中を笠置城の北側に当る石垣を伝つて城内に侵入しようとしたのだが二百メートルほど進んだ所で岩石が聳えて松の枝が伸び、苔が生えて滑り易くなっている場所があった。是は猿でも無ければ通過出来ないであろう：と一行の足が止まった。すると首謀者の陶山藤三が猿の様に岩の上を走り、縄梯子を木の枝に掛けて岩場を下ろしたので、一同は難無く其処を通過出来て其の先には其れほどの難所も無かった。

葛の根に頼り、苔で滑る場所は爪立てて慎重に、それなりの時間は掛かったが城の堀際まで辿り着いた。暫く其処で息を釐めていと城内の夜回りが来たので、其の後をつけて警備を確認したところ正面の木戸と西の坂口には伊勢・伊賀の軍勢が千余騎で陣を布いている。東は出堀で囲まれ、大和・河内の五百余騎が固めており、南の坂口には仁王堂が有り紀伊・和泉の七百騎が布陣している。ところが北口は険しい山なので攻撃されないと判断したようで、見張り櫓は有つても警備兵が居らず形式的に置かれた数人の見張り役が櫓から降りて焚き火に当りながら眠っていた。

潜入していった陶山らは城内を素早く偵察してから天皇の御座所を探して本堂に向かおうとしたところ雨中でも足音を聞いて怪しんだ者が居る。寝ぼけ眼ながら建物から首を出して「何者ぞ！」と誰何したので陶山一族の藤三が「：大和勢ですが風雨激しい夜なので念の為に警戒をしております：」と答えた。相手は確認もせずには納得したから其れ以後は大声で「：風雨が強いので御用心なされよ！」と真面目に叫びながら徐々に本堂へ近

づいて行った。本堂は仮の皇居にしたらしく、さすがに深夜でも灯りが灯されていて数人が寝ずに番をしていた。其の武士に「何方ですか？」と聞かれたので天皇方の武士で知っている名前を名乗り回廊に座り込んだ。周囲を見回しても武士が居ない様なので其処から本堂の後部に在る山に登り、無人の堂に火を掛けて同時に鬨の声を挙げた。

此の騒動に反応したのは城内の兵たちでは無く包囲していた幕府の軍勢で「：さては城内に謀反が発生したのであるう：是に合わせ一気に攻撃せよ！」と表門・裏門へ一万余の軍勢を繰り出したから其の声は天地を響かせ山も崩れんばかりの勢いであつた。其れに忘れて陶山ら五十余人は見て来たばかりの城内に戻り鬨の声を上げながら要所所に火を点けて回つた。

奇襲攻撃を受けた城方の軍勢は此の状況を良く確認もせずに「既に多数の敵が城内に攻め込んで来た！」と勝手に解釈したから防戦どころでは無くなつた。多くの者が鎧・兜を脱ぎ棄てて身軽となり、崖と言わず堀と言わず倒れ伏し転びつつも必死に逃亡を図つたのである。難攻不落を誇つた山城であるから逃げるのも容易では無い。

其れを見た錦織判官代と言う武士が「：何と卑怯な振る舞いであろうか：天皇に頼まれ武家（鎌倉幕府）を相手に戦う者が敵の数が多いと言って逃げるとは情けない：此処で戦わずに、何の為に命を惜しみ名を惜しむか！」と叫びつつ向かつて来る敵に走り掛かり縦横無尽の活躍をしたが誰も逃げるのが忙しくて協力してくれない。矢を射尽くし太刀が折れてしまったので、気の毒に父子二人と十三人の家臣が其の場で腹を切つて果てた。

（続く）